

女性医師の窓

女性外科医ってどうよ？

石川県立中央病院心臓血管外科 池田 知歌子

近年外科系の学会で女性外科医について論議される場が多くなりました。女性医師は増加し、全く珍しく無くなりましたが、外科系、特に心臓血管外科領域で、結婚・出産・育児までやりながらも現役で「バリバリ」働いている先生となると、正直まだまだ全国学会発表モノだったりします。

先日、第42回日本心臓血管外科学会学術集会、女性医師支援の会に参加しました。最近では医学生に男女共同参画を掲げた授業を行う大学もあるそうです。女性医師の結婚相手の多くが男性医師であるという現状を踏まえて、学生のうちから教育してしまおうということのようで、すごいですね。

次に女性医師代表として発表されていた先生は、某病院の小児心臓血管外科医でお子さんは2人。彼女が勤務する病院は、年間300例以上の小児心臓手術を3人のスタッフでこなしています。夫も医師ですが、朝出勤する時間は彼女の方が早く、心臓手術の術後管理でほとんど家に帰れない毎日。当直も相当な頻度で当たるそうです。にもかかわらず、2人の育児をしながら仕事を続けられたのは、夫のサポートと、なんといっても上司の理解だったと強調されていました。また日頃から「自分にしか出来ない業務」を減らすことも大切だったといいます。更に夜間でも子供を預けられる施設や制度が充実しているかも重要だと。しかし実際に彼女のような女性心臓血管外科医がほとんどいないため、その筋では知らない者はいない有名人です。

男性医師で育児休暇を取得された方も体験談を発表されていました。育児休暇制度も日々進化し、以前は1度しか取得できなかった育児休暇が、出産後初期に取得した場合は再取得が可能となるなど、非常に勉強になりました。ただ、会場の男性医師に「自分が今後育児休暇を取得したいと思いますか」と問うと希望者がいなかったのが印象的でしたけど。これが現実でしょうねー。

興味深かったのが関東の某大学医局長からの発表。

その医局は消化器外科も同門で、女性医師の数も比較的多いのですが、外科医として職場復帰できたのは、現実には約半数。他は外来のみとか検査のみなど、外科業務に携わらない形での復帰か、医師を辞めてしまった人も。また、外科系は基本的にチームで動きます。自治体にもよりますが、国公立病院は国や県に人事決定権があり、臨機応変な人事配置が難しく、女性医師の妊娠出産にあたり短期間の増員をお願いしてもすぐには実現不能な場合も多いと。了承されても非常勤扱いになることが多く、休んだ女性医師の代行医は、前任の常勤職を退職して、給料が安く保証も少ない非常勤として赴任しなければならなかったりすることもあり、医局としても苦悩するそうです。ある程度臨機応変な対応が可能な民間病院を関連病院として充実させるのも、女性外科医が増えてくると重要かもしれない、とのことでした。

現在認定医・専門医制度がある70学会のうち、「更新期間の留保条件がある」のは54学会、うち「妊娠・出産」で留保を認めるのが34学会、「育児」では30学会。最近は専門医更新に手術症例数の縛りがありますし、妊娠・出産・育児が重なると、専門医更新も難しいことになりそうです。今後改善して欲しいと思います。

私も、いつまで続くかなーと思いながら、早12年目。術後に泊まる部屋がなくて雑魚寝していたら女医当直室を作ってもらえたことも。なんとか心臓血管外科医を続けられたらなーと思う今日この頃です。